2020年9月17日　RA協議会 第6回年次大会

若手研究者が国際的ファンドに応募した理由
応募しなかった理由

熊本大学国際先端医学研究機構（IRCMS）　特任准教授

佐田　亜衣子

経歴

2006 → 2011 → 2016 → 2019

静岡大学
理学部
塩尻信義先生

学振DC1

HFSP
long-term fellow

海外学振

HFSP CDAやgrant
応募していない・・・
今年Intersteller Initiativeに採択
国内研究費（AMED-PRIME、科研費
財団助成金）により主にサポート

総合研究大学院大学
5年一貫制博士課程
博士（理学）取得
国立遺伝学研究所
相賀裕美子先生

マウス精原幹細胞
におけるNanos2の解析

米国コーネル大学
ポスドク（5年間）
Dr. Tudorita Tumbar

マウス皮膚幹細胞
の同定

皮膚の再生と老化を担う
幹細胞の役割

筑波大学TARAセンター
助教（3年半）
柳沢裕美先生

熊本大学IRCMS
特任准教授
佐田研発足！

私がアメリカにポスドク留学し
国際的ファンド（HFSP長期フェローシップ）に応募した理由

(1) 留学することやフェローシップをとることが
キャリアアップのために重要であるという意識があった

研究・教育環境、意識改革

(2) HFSPは若手の登竜門だと研究室の先輩から聞いていた
HFSPへの応募を留学先のボスから勧められた

情報

(3) 大学院＠遺伝研で英語を使うことに慣れていた

研究者向けの英語教育

（若手）研究者の留学や国際的ファンドへの応募を阻む壁

(1) 国際化や留学に興味がない
研究・教育環境、意識改革

(2) 情報が少ない、身近に同志がいない
情報

(3) 英語が苦手
研究者向けの英語教育とサポート

(3) 留学に対する家族の理解がない
ライフイベントや家族に対するサポートが少ない
研究者と家族の問題

(4) 若手研究者の独立性、不安的なキャリア、余裕がない・・・
（若手）研究者をとりまく研究環境やキャリアの問題

課題１：研究・教育環境、意識改革、情報提供、英語力向上

解決策1
・国際化、留学が“当たり前”と感じる研究・教育環境づくり、情報提供、英語力向上

遺伝研、筑波大、熊大IRCMSなど積極的に国際化を推進している組織
身近な留学生の存在、留学経験のある先輩や先生の存在
国際学会への参加、短期留学制度
研究の現場で使える英語教育（遺伝研メソッド）
留学体験記、留学関係セミナー、SNS等を利用した情報展開
国際的ファンドに興味がありそうなターゲットを絞った声がけ

解決策2
・早い段階での留学経験やサポート制度

留学デザインProgram（ケイロン・イニシアチブ、UJA）、トビタテ！留学JAPAN etc

自分の体験
中学生のときに地元の海外派遣事業でオーストラリアにホームステイ＆学校訪問
→世界で活躍する人になろう！と決意

課題２：家族の理解、ライフイベントや家族へのサポート

仕事か家族か
悩みに悩む30年間

研究に100%の力を
注げない6年間・・・

2011

Age 18 22 27 32 36

静大 → 博士課程@三島 → ポスドク@アメリカ → 助教@つくば → 准教授@熊本

チャリ部で出会う（理学部と工学部）

彼氏就職 @東京

入籍 単身渡米

夫退職 渡米 在宅プログラマー

出産

育児は続く・・・

保育園変更 x 5回

パートナーの仕事や生活はどうする？

留学への反対や批判

妊娠中、出産後の
過酷な生活・・・

子供の病気や家族のイベント、居住場所、介護etc

課題２：家族の理解、ライフイベントや家族へのサポート

解決策１
・研究者と“家族”をサポートし、課題を解決する仕組みが必要

ケイロン・
イニシアチブ

家族をサポートする助成金制度
海外における情報の共有
（引越し、居住環境、ビザ、保険、海外での出産・育児など）

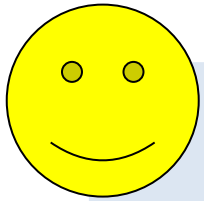
解決策２
・パートナーのキャリアを配慮した人事

課題３：若手研究者の独立性、不安的なキャリア、余裕がない・・・

若手研究者向けのサポートが増え
状況が上向きになるのでは？

解決策1
・留学中に人的ネットワークをつくること

UJA（海外日本人研究者ネットワーク）
海外から国内学会に参加するためにもフェローシップは重要
留学中につくった人脈は、国際共同研究にもつながる



留学したら日本ではポジションが探しにくくなる？

留学したからこそ得られる人脈、能力、
研究成果と発展、人生観の変化がある！

自分の能力を高めることで、
長い目で見るとプラスになり、選択肢も増える！